



鳥居

鳥居



鳥居
鳥居
鳥居

鳥居

鳥居

鳥居

五十一

李

花ごふん竹を赤くごうんてをまろ汁
或ハ白福木よりまろ福子の汁け合
るに似てふやひを入る

紅雀

此鳥は赤い毛しきくまも毛のふかふか
にしてその外竹を赤く地肉をわろくす
先んまよりまろ福子汁を毛まろ

五十二

山茶

茶梅花 海紅花

白赤あり白いむし地白福の具わごうん
くままごふんを赤くまろ汁をうくか
福子よりまろ福子汁をうくか

鴉

此鳥は黒く目の内黒くわろ汁をうく
中よりまろの具福切をば服くまろ
の具上よりまろ汁をうくか
白いむし竹を赤くまろ汁をうくか
肉をわり上り茶をうくか
母よりまろ汁をうくか
服まごふんをうくか

らん毛や嫩の表の葉坊と

竹之





やういふより秋海棠のこころさしい

収

五十三

秋海棠

花は地を下の果わりの多なりまあるが
葉は細くわたりは毛をよりの葉のけ
ゆるゆるわりのさびざりよりあつとあ
らうくべし

五十四

系櫻

垂絲櫻

花はうん付をさぶらうんはてさうさ
葉のけ葉二つに細くし純合葉土も
ゆるゆる葉のけは上二つに細くし
よ葉のけはゆるゆるあはれも大いの中
考へ合を結わいてあが

五十三

鷓鴣

嘴はまたはきし物持しきくはききも
唇の色之上に朱をくみくふくのちも
どくよりさつと合を思ひあけてさ
すりざり

五十四

練雀

練雀は尾長し連雀は尾短し此角は
はきし物持しきくはききも
どくよりさつと合を思ひあけてさ
すりざり

むらさきとあつてとりもあつたふ
月ころひのけさ様ろも



推如



美鶴の羽あもり井子のむ

妻木 琴洲

五十五

嬰子粟

朱壺 朱囊花

花の葉あり花白くごらん日多むくねハ
心内も上朱は白く花の具の上と
一まをあり地葉の汁を色黄めれ合を
くつひの紅色の葉の汁をとりて
白くごんをくべし葉葉白く葉の汁

鶺鴒

黄鶺鴒

花の葉あり花白くごらん日多むくねハ
心内も上朱は白く花の具の上と
一まをあり地葉の汁を色黄めれ合を
くつひの紅色の葉の汁をとりて
白くごんをくべし葉葉白く葉の汁

五十六

鼓子花

旋花

花の葉あり花白くごらん日多むくねハ
心内も上朱は白く花の具の上と
一まをあり地葉の汁を色黄めれ合を
くつひの紅色の葉の汁をとりて
白くごんをくべし葉葉白く葉の汁

鴿

花の葉あり花白くごらん日多むくねハ
心内も上朱は白く花の具の上と
一まをあり地葉の汁を色黄めれ合を
くつひの紅色の葉の汁をとりて
白くごんをくべし葉葉白く葉の汁

鳥の羽 雛小 淋た くらて

可 叟



かやうの鳥は、いづくに飛ぶか
わづらひとて、いづくに飛ぶか

故人

輔



五十七

蒲公英

花ちまの具あぶらんけつさよは
けしき草のけりうまふとニ
むんぼりうま
けしき草のけりうまふとニ
けしき草のけりうまふとニ
けしき草のけりうまふとニ

五十八

黄蜀葵

秋葵

花ちまの具あぶらんけつさよは
けしき草のけりうまふとニ
むんぼりうま
けしき草のけりうまふとニ
けしき草のけりうまふとニ

雲雀

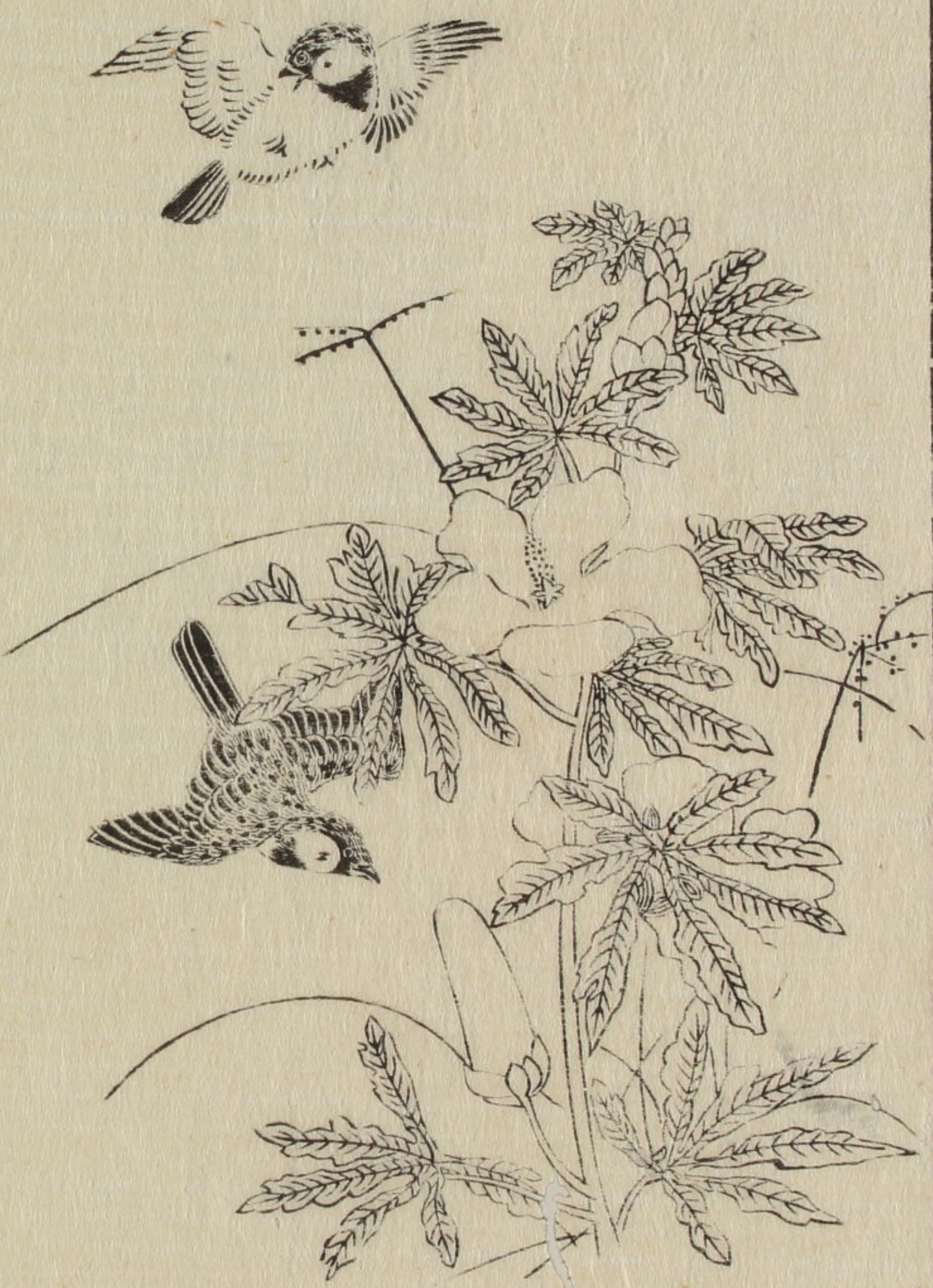
花ちまの具あぶらんけつさよは
けしき草のけりうまふとニ
むんぼりうま
けしき草のけりうまふとニ
けしき草のけりうまふとニ

雀

花ちまの具あぶらんけつさよは
けしき草のけりうまふとニ
むんぼりうま
けしき草のけりうまふとニ
けしき草のけりうまふとニ

在云松庭やうけ楮

白王



あつてはくは通静やうけ

養百堂

一號

五十九

櫻

拾 花枝品あり略々

花も地多やの長くすくをやうはあごらん
白ひたもれ具うを長くべし中はらく
でうはそりを入るしはあ合もりごあや
りうまよに二がん御まうもくくべし
ふもみうそりあけうくもくくべし合
まうてさあひと入べし

秦吉了

嘴足多とあごうけては立嘴のりあん
ししてままうべしお種量はては立
しりひもてこんぞうあをあひはべし
いひあ志まうもくくべし一風切ら
あごらん入べし

六十

豆藤

花もまうの具志まうけうか朱まう
はてあべし小枝ま朱まうけうけうべ
し

小陵鳥

嘴足多とあごうけては立嘴のりあん
ししてままうべしお種量はては立
しりひもてこんぞうあをあひはべし
いひあ志まうもくくべし一風切ら
あごらん入べし



粒一豆 藤名リ 小陵鳥一異 輕
精一神 模一寫ノ 妙 真似 發如鳥

岩 吟 水



宰相の情や頬白の如き

如風

六十一

芍薬

将雛花

赤ヲ本者赤ト云白ヲ金者
葉ト云子葉ヲ小牡丹ト云

花は地を人の長を人の短は仕立牡丹の如く
合は細女もあつたしと入へり白いこと
わりのせんがまはあつたしと入へり白いこと
さよのけし

畫眉鳥

昔はさくらをまよと合はまよとけ頬白し
と入へり白いことと入へり白いことと入へり
白いことと入へり白いことと入へり白いことと

六十二

覆盆子

莓子 草莓ト云也

花はさくらをまよと合はまよとけ頬白し
と入へり白いことと入へり白いことと入へり
白いことと入へり白いことと入へり白いことと

翡翠

魚の 鱗

昔はさくらをまよと合はまよとけ頬白し
と入へり白いことと入へり白いことと入へり
白いことと入へり白いことと入へり白いことと

かきくくくくくくくくくく

子
花
好



かきくくくくくくくくくく

萬
金



茗の耐や茶葉のむらり

斗百

六十五

茶葉

花ごうんくは葉保まきのけあうと
しうらまふりとりひれどと合ぢ

頂小鳩 又 斑鳩 鶉

昔はよくは月茶どの類あうたうも服
ごうんくまは葉保まきのけあうと
しうらまふりとりひれどと合ぢ

六十六

石榴

花ごうんくは葉保まきのけあうと
しうらまふりとりひれどと合ぢ

八頭

昔はよくは月茶どの類あうたうも服
ごうんくまは葉保まきのけあうと
しうらまふりとりひれどと合ぢ

松栢咲く時 八川町

曼美



千代子や 松栢の 八川町

第泉

六十七

葛

葛の根を煮たの汁を飲むと長生不老の薬と云ふ
けりて葛を煮入るべし

鶉

鶉の肉を煮ると長生不老の薬と云ふ
けりて鶉を煮入るべし

六十八

鶉

鶉の肉を煮ると長生不老の薬と云ふ
けりて鶉を煮入るべし

文鳥

文鳥の肉を煮ると長生不老の薬と云ふ
けりて文鳥を煮入るべし



鶉の肉を煮ると長生不老の薬と云ふ
けりて鶉を煮入るべし



鶴の尾や切ひしる葉水仙 水光

六十九

水仙

金盞銀臺トキ

花ごめんわり四一重五重の具と差白
緑わりとろは先よりあやまきわらひと
を赤縁を裏白縁草のけりうはあま
あり

鶴鴒

黄鶴鴒

背角さきの筋は筋より勢神うすまきま
草のけりけ風切尾を仕立後ごめんわり
毛うさごめん編くわかしちまうさそと杯
こぞー

七十

石竹

白はさうすあわり花を赤色の竹立紅い
肉色上朱白ごめんひきさたあやまき
さたあやまの具をさくはいつれもあまき
うらうらうらうはさくはあまきあまき
係よりけさ草のけりうはあまきあまき
とぞー

比翼鳥

鸚

背角さきの筋は筋より勢神うすまきま
背中勢神あやまきを仕立後ごめんわり
切らすまきわりあらけ志うさくはあまき
筋はあまきあまきあまきあまきあまき
立上らるるあまきあまきあまきあまき
あまきあまきあまきあまきあまきあまき
あまきあまきあまきあまきあまきあまき
尾雄よりあまきあまきあまきあまきあまき

石竹やきねいしとて
頃折ひ



浅賀



きねいしとて
頃折ひ

馬州

七十一

桔梗

白く二色あり地味黄淡合なり
くまよひこんぽりわり中よりこふんくまよひ白
全株こふんは立葉を細くさき若草の汁より
くぬがゆを極よくとまて入極合しうご
付立葉をみけてつと又こふんくまよひ
こふんつと又又葉の具して付立葉
どけてはくこと若はかす同

黒鶉

嘴は合葉土類白くこふんくまよひから
黒鶉は合葉土類白くこふんくまよひから
黒鶉は合葉土類白くこふんくまよひから

七十二

丁子草

花こんやう竹立を赤くして付立
くぬがゆを若草の汁はく

尾長

鳥風

嘴は合葉土類白くこふんくまよひから
白くこふんくまよひ中後黒色の具して
風初白くこふんくまよひ中後黒色の具して
二年の尾あきれはく



尾長くまよひと黒くしむ丁子

逸志

